

027
508
1

堅
菊
品

禁
書
出

027
508
1

聖女知蒙
第11566號
圖書

99-511
815



堅々解品

序

嘗聞昔者居士之河合氏信春を慕ふ所と云位所
誦訪の度也つらぬ多敷ありまじ江都におもむかひ
乃こらより道意庵より好む所とてある河合氏持成
爲りてを多しとす一を蕉門の阿弥陀佛のわしに負言す



四葉外仲秋夜鹿言出のれ此人を信じて記し
涙のあはれしむらひのちよふまにたれあはれしむらひ
あしむらひのあはれしむらひのちよふまにたれあはれしむらひ

あはれをいふは出づる言はれぬ
毎日のけふは接乃日陰なり
昔の月を望みよきうけり
さしつかへなくおとす可也

梅裡
一清
欣尚

秋意をいふはぬ腕れ言ふは
わがまをいふはぬ腕れ言ふは
挿し立てうきぬ女衆よきうけり
さしつかへなくおとす可也
氷をいふはぬ腕れ言ふは
貝をいふはぬ腕れ言ふは
月影をいふはぬ腕れ言ふは
門をいふはぬ腕れ言ふは

寄泉
士芳
李裳
春湖
不逞
三楓
指石
松高

汝はちのこは河魚れ言ふは
彼をいふはぬ腕れ言ふは
露をいふはぬ腕れ言ふは
花をいふはぬ腕れ言ふは
けしきよきうけり
口上ありはうきまをいふは
袖ありはうきまをいふは
思ひはぬ腕れ言ふは

臺湖
李暖
象竟
乙也
修竹
枕里
有奕
桃舟

あはれをいふはぬ腕れ言ふは
あはれをいふはぬ腕れ言ふは
あはれをいふはぬ腕れ言ふは
あはれをいふはぬ腕れ言ふは

西甫
士前
百壺

口上ありたうまきとり
袖あそく玉燭乃風を陰と人
思ひも今よと邦魔を記 石

仙舟
桃里
有来
桃舟

若林はむんぬのちへ生てあふ
只のぬぬは色くひのちを 夏
涙そそれあそくといふ 和申 鼓

西甫
士前
百壺

一暇下畧

梅樹やさきそくは道里平んく
捨言そそんぬのり 明くそ庭の草

半翁
鶴竹
梅魚

夏堂此中丸美亭をそくは道
うすあそくをきく此を補ふ 心太
梅そそくわあそくはうそ竹そそく
梅そりや 持ゆそ林と眼のしそ
あ梅は 思あたきう 今亭并
ああ昔の ちうそあそくはわこそ林
隣 うそ買をそくは 鱧くそ車
風そそくは 鱧くそ車 鱧くそ人

大は
仙翁
帆道
桃里
小退
車琴
百壺
か
悠平
由誓

眠そそくは 夢梅は下たそくは 大
あそくは 葛梅浦うそあそくは ちうそ
ゆめあそくは 梅うそあそくは 時そ

山
李裳
月栖

干傘能回りてみけに巻く 留
影うつさ池のふらうやまきすき
種よ出さるる 種あり青き り種
士芳 喜湖

夕立やとらげをそひとらと
赤免

陰なくやうさるん 出るふれあ
三楓

せみの丸九町や暖簾の中 多きと
喜良

さへ 此月六つとて終ひりらん
二得

有る 乃日と終あつや金銀を
七院

往還より能出 へ 故きうの
善法

明る戸や影よあさうと故のぬる
有夷

故のまや 若葉あさう手振籠籠
似尚

桐葉の青より影や夏せぬ
李喚

初めかとおと終はまてうとん 草子
百耕

影くやあさう足あゆく 屋敷 畑
西南

十葉や傘能むちをす 扇をうら
暮曉

可もて ちかんのひらき 舟内 柳の
写三

好くも ちかんの柳のや 草のむし
如翠

夢中も ちかんの柳のや 池の蓮
豊岬

あつと 柳は ちかんの柳のや 池の蓮
昇丸

白き花 ちかんの柳のや 池の蓮
淡良

居りあふを 影よあさる 舟のうら
玄皇

ま柿の枝たけむしを 萩 へん
豊岬

りてあふを 影よあさる 舟のうら
赤鳥

川上や ぬきまのまき寸 予言 妙算

青年

ふりこつ 釣籠の 喜や 梅ありや

露牛

予言の 鳴きつや 夢あをむ 虫の 自由

栗山

日さかりや 松の 燈をむ 樫の 輝

梅裡

まきより とも 鳴り 影の 日は 乃て

芥舎

風をよよ 浮てす ち 乃や 一 風

茂賢

あけの ちと 小 葉をす 夕 鳴り

伯英

吹り 此 まより ちと 初 葉

如作

遠風 此 ちと や 夢 此 け ちと ちと

吉胤

す ちと ちと ちと ちと ちと ちと ちと

乙也

ちと ちと 帆 木 縁 けり 磯 在 不

士前

と ちと 一 火 此 傍 ちと ちと 月 あり

丙辰

ぬきまの まき ちと ちと ちと ちと ちと

修介

喜ぬの ちと 山 ちと ちと ちと ちと ちと

茶雷

夜 事 ちと ちと ちと ちと ちと ちと

大年

ちと 月 出 ちと ちと ちと ちと ちと

如儼

ちと ちと ちと ちと ちと ちと ちと

〃

